神理の郷よもやま話②

北九州市の文化財を守る会理事長　宇野　慎敏

前回、明治初期、すでに神理教本院において「物部氏（もののべし）」との関わりを指摘されていることが明らかとなった。次にそうした関係を築き得る母体、集団がこの地域に育（はぐく）まれていたのかを検討していきたい。

この神理教本院の所在する地、現在の北九州市小倉南区徳力にいつ頃から人が暮らし始めたのか。それは本院の西を流れる紫川（むらさきがわ）の対岸の長行（おさゆき）遺跡がみつかっている。

今から二万年前の後期旧石器時代の細石刃核（さいせきじんかく）（イノシシやシカの肉をさばいたりする庖丁の役目をする石器の塊（かたまり））が出土している。

桜橋周辺では早くから川で魚を獲ったり、近隣の山でイノシシやシカを獲って生活をしていたのであろう。

紀元前一千年前ほど前の縄文時代晩期になると、この辺りには一気に人が多く暮らすようになる。

本院のすぐ南側の丘陵裾部の春日台遺跡、本院のすぐ西裾部の上徳力遺跡そして対岸の長行遺跡があり、本院周辺には多くの縄文時代人が住んでいたことが分かる。

さらに驚くべきことに対岸の長行遺跡では縄文時代晩期の黒川式土器にコメのモミ痕がついていたことである。

このことは玄界灘沿岸の唐津市菜畑遺跡からも縄文時代晩期の水田跡がみつかっているが、そこことほぼ同時期ぐらいにこの本院周辺に住んでいた人たちも稲作をしていたことになる。

すなわち本院周辺の人たちは、稲作の先進地帯の人たちであるということである。

また今から四十年ほど前の本院のすぐ西の国道三二二号線・都市モノレール小倉線建設工事による発掘調査で、今から二五〇〇年ほど前の弥生時代前・中～後期、終末期の環溝集落がみつかっている。

直径三〇〇ｍほどの環状に溝を廻らす集落である。

ムラの周囲に溝を廻らすということは、外敵からムラを守ると同時に、ムラに住んでいる人たちが共同で稲作をしたり、生活を助け合ったりして、一つのムラで共同作業をするようになり、組織化していく。

ムラが組織化すると必然的にリーダー的な人と、そうでない人たちが出てくるようになる。

これが階級社会への第一歩である。ムラの長と一般の人たち、それに生口と呼ばれる奴隷たちがいる。

さらに驚くべきことに本院の北、五〇〇ｍに下徳力遺跡があり、現在の徳力公団前駅の下から弥生時代終末期の竪穴住居跡が見つかっている。

その住居内から銅製錬滓（銅を溶かした時のクズ）が三点発見されていることである。

すなわち、ここで弥生時代の終末期に銅製品が生産されていたことになる。

弥生時代終末期の時代に銅製品が製作されているところは、奴国の春日市、伊都国の糸島市、筑前町ヒルハタ遺跡などごく限られた地域でしか生産されていない。

そうした弥生時代終末期の先進工業地帯ともいうべき地域がこの徳力地域なのである。

そして有力首長層のお墓も本院から北二〇〇ｍの「とんかつ濱かつ」前の道路下から一辺六・七ｍの方形周溝墓がみつかっている。

残念ながら埋葬施設はすでに削平されてなくなっていたが、この地域に有力首長層一人のためのお墓が造られていることは、すでにこの地域は、階級社会になっていることを示し、銅製品をも製作し得るほどの一大勢力が存在していたということになる。

この時代に銅製品を造り得る地域は、現在の北九州市域ではこの徳力以外では見つかっていない。

したがって、弥生時代終末期の北九州市内では、この本院を中心とした徳力地域が最も栄えた中心地で、奴国や伊都国に匹敵するほどの勢力に成長していた地域だったということである。

上徳力遺跡第一地点1.号溝の中の大量の弥生土器
（北九州市埋蔵文化財調査報告書第76集より）

上徳力遺跡第十地点の方形周溝墓（右側の周溝の中に祭祀用の土器が多数見つかっている）
（北九州市埋蔵文化財調査報告書第七七集より）